

ライフデザイン学部での14年を振り返って

生活支援学科子ども支援学専攻 中原美恵

2005年4月、ライフデザイン学部は、東洋大学の9番目の学部として、この朝霞の地に誕生した。私は、前任校で1年次から担任した学生と一緒に卒業することをお許しいただき、1年遅れて着任することになった。徒歩圏の前任校から電車で二時間弱の朝霞通勤に慣れるところから、戸惑うことの多い日々であったが、子ども支援の専門職養成という新しい扉が開かれた喜びをもってのスタートであった。おそらく、着任当初は、私の取り組みが周囲を驚かせたり、慌てさせたりしたのではないかと思う。前任校は情報系の新学部ということもあって、先進的な試みをしていた。担当する心理学の授業でもネットワーク技術を活用した仮想実験など取り入れていた。そのサーバーにリンクさせてもらい、朝霞の教室でも「さあ、携帯を使ってやってみましょう！」と錯視の実験をやってみた。だが、今なら何でもないことも、当時はいくつも壁があって思い通りにいかなかった。その度に、詳しい職員に相談しながら方向転換が必要なことを学んだ。大学における教職協働の大切さは、その頃から職務遂行の核として私の中に位置づいたように思う。

また、それまで、国公立の学校や地方自治体の現場で教育臨床や教育行政の研究的実践を重ねていたため、私立大学の教員養成課程や保育士養成課程の実務にも戸惑いがあった。さらに、総合大学の中にある保育者養成課程がの存在自体が珍しく、ライフデザイン学部生活支援学科幼児教育・保育コースを学外に認知してもらうのは、なかなか困難だった。教育実習受け入れのお願いに回っても、「ライフデザイン学部？」と首を傾げられることが多かったし、学生たちも様々な場面で「ライフデザイン学って何？」と問われ、困っていた。「ライフデザイン学」は、学部開設にあたって創られた用語である。そこに込められた理念をどう説明したらわかってもらえるか、学生と何度も話し合った。

そうした日々の中で、何よりも私を勇気づけ、支えてくれたのは、このライフデザイン学部を選び、創設期を共に過ごした学生たちの存在であった。彼らと共にあることで、「何のためにこの学部の教員に加わったのか」「自分がなすべきことは何か」を自らに問い、その使命を見失うことなく進むことができたように思う。

そして、学生が学外実習に出ていくようになると、彼らの真摯な取り組みや洞察の深さは高く評価された。受け入れた実習施設からぜひ職員になってほしいという声が寄せられるようになった。学生たちは、子どもの育ちを支援する視点をもって実習に取り組み、保育現場の課題をしっかりと見極めて、大きく成長した。4年制大学として保育者養成にかかわることの意義を改めて認識することができた。そして、2009年度には、子ども支援学専攻（Social Work and Child care Course）となり、児童福祉や幼児教育領域の教員を加え、「子どもの最善の利益を追求し、子どもの幸せな育ちを支援する」保育者養成機関として、新たな歩みがスタートした。子ども支援学専攻設立から11年が経ち、既に多くの卒業生が保育の現場を支える貴重な人材として活躍してくれている。

2016年には、ライフデザイン学部設立10周年を祝う行事が開催された。学生時代の学際的、融合的学びを基盤として、子どもの育ちを支える専門職としての自己のあり方を探求し続ける卒業生の姿か

ら、大きな力をもらうことができた。子どもの育ちや子育て期の家庭を支援するための、学際的、統合的な実践学を追究する…この過程を学生と共に歩み、有為な人財を社会に送り出すことができたことは、教員としての大きな喜びであった。

この年、将来ある大切な命を失うという専攻として初めての経験をした。いろいろな思いが交錯する中、『より深くこの喪失を受けとめているのは誰か』を第一に考え、できる限りの対応をしようと心がけた。それが長男の誕生日と重なったこともあり、毎年その日のことが鮮明に思い出される。大学教育として何を大切にすべきか、ずっと問われ続けてきたように思う。

もともと「新しくできるライフデザイン学部にと、私に声をかけてくださったのは、社会学部の森田明美教授であった。ある自治体の会議メンバーとして、子ども施策のプランと一緒に作成した。森田先生が目指す子ども・子育て支援の構想は、筋が通っていて本気の迫力が感じられた。東洋大学に入ってから、経験を重ねた保育者の学びのニーズに応える大学院教育を通して、その“本気”につきあうことになった。そこでも様々な出会いがあり、真摯に学び、成長する人に寄り添う幸せを感じることができた。加えて、森田科研チームとして、10代で妊娠、出産する女性の支援に関わる実践的研究を継続できたことにより、子ども・子育て支援の視野を広げることができた。包括的子ども支援において“学んで自ら成長する主体”を育てることがいかに重要かを痛感した。

2017年度からは、月、火は朝霞キャンパスで授業、それ以外は、白山キャンパスで学生支援の課題に取り組むことになった。それまで、ほとんどお会いする機会もなかった竹村学長から、学生部長にとのお電話があった。まさに青天の霹靂に違いなかったが、どこかで天命かと思う自分がいた。あの時、確かに何か私の決断を後押ししていた。今は、それを不思議に思う。そして、子ども支援学専攻の教員はもちろん、学部長、事務部長をはじめとする朝霞の教職員の理解と支援があって、東洋大学初の女性副学長・学生部長がライフデザイン学部から誕生することとなった。

初めは、白山6号館の通路ですれ違っても、誰に挨拶してよいかわからなかった。それでも、共に壁を乗り越え、新学部を創ってきた元朝霞事務課のメンバーが白山のあちこちにおいて、応援してくれた。学生部職員にも支えてもらいながら、貴重な経験を重ね、充実した日々を送ることができた。“学んで自ら成長する主体”が育つ学生支援を目指し、課外活動の健全化や充実を図り、学生のウェルネスの実現を支援する取り組みにも着手した。

どこに行っても、何をやろうとしても、それを受けとめ、理解してくれる人に出会え、共に歩むことができたことは、大変ありがたいことであり、幸せであったと改めて思う。東洋大学での貴重な出会いと皆さま方のご厚情に心から感謝すると共に、2021年度以降の赤羽台キャンパスにおける学部のさらなる発展を祈りつつ、退職のご挨拶としたい。



2009年3月第1回卒業式



2020年1月最終講義